



二度めのチャイムでドアの鍵が外される音がして、美佐子が顔を覗かせた。
「待ってたわ、上がって」

出迎えた彼女は笑顔を浮かべていた。だがその表情の向こうに、隠しきれていない緊張を私は感じ取る。

玄関を上がってすぐの洋間に通される。部屋の向こう側にある半分開いたアコーデオンカーテンのから、もう一つの部屋に置かれたベッドが見えた。そして向かって左側にはキッチンへ通じているのだろうかがある。一人暮しにしては都会では贅沢と言って良い部屋である。

しかし私が彼女の部屋に入って目を引かれたのは、そんな事ではなかった。

私を通された部屋には一方の壁のすべてを占める本棚があり、そのほぼすべてがハードカバーや他の雑多な本で埋っていた。そしてカーテンが引かれた窓際に置かれた机の上には、有名家電メーカー製のデスクトップ型ワードプロセッサが置かれてあった。多分それは、最高級の機種だろう。

「驚いた？」

美佐子が本棚と高性能ワープロを見つめている私の背中に向かって言う。

私は部屋に置かれたソファに座り、答える。

「確かにね、少し……」

美佐子はワープロが置かれた机の椅子に座り、私と向合う。相変らず微笑んでいるが先程私を迎え入れた時よりも緊張が増しているようだった。

「君は……?」

「私ね、ライターなの。」

「ライター? 作家なのか?」

「フフ……作家とは違うの、雑誌なんか色んな記事を書くの、新製品の紹介、食べ物の記事、舞台のレビュー。ふふつ……一度なんか妊娠中絶した女子中学生のインタビューなんてのも書いた事もあるわ」

「驚いたよ、本当にね。君がマスコミ関係だったなんてね」

「そんな御大層なものじゃないわ、記事に名前も出た事もないし」

私は何故か怒りを覚える、いや、苛立ちか？

「つまり君があのお店に勤めたのも何かの記事の爲ってわけかい？　そして十分に（取材）が済んだから店を辞めた。ついでに男を一人引っ掛けたと……」

私は急に言葉を切る。美佐子の表情がついに笑顔の下に隠した（緊張）をあらわにし、涙が瞳の中で浮び上がっていく。

違う！　そんなんじゃない……私が店に勤めたのは……止めたのは……そんなんじゃないわ」

「じゃ、何故なんだ？」

私は私から視線を外し、横を向いた美佐子に問いかける。

「寂しかったの、この街で一人で……」

一瞬言葉を切り、私に向き直る。視線が合う。外さない。そう、初めて店で合った時のように。

「ううん、違う。私、男が欲しかったの、私を抱く男が欲しかった。それで貴方を見つけたから、店を辞めたの。」

「……」

私は無言で美佐子の視線を受け止め続ける。それをどうとらえたのか、美佐子の目から涙が零れ落ちる。

「貴方だって、貴方だって同じでしょ、あんな店に行つて女を抱く、欲望の処理よね、私だって、女だって……！」

私はソファーから立ち上がる。先程感じた怒りなど既に跡形もなくなっていた。美佐子の肩を抱く。

「悪かった。つまらない事を言つたよ、多分驚いたからだと思う」

美佐子の両腕が私の背中に回され、強く抱しめられるのを感じる。

「ごめんなさい」

「君があやまる事はない、俺が君の事を誤解したんだから……」

（誤解）　つて言つてくれるのね、嬉しいわ」

私は彼女の肩に置いていた手を彼女の頬に当て、そこに跡を付けていた涙を親指で拭い取る。彼女の唇が開く。

「抱いて……この前貴方がしてくれなかったやり方で抱いて欲しい……」

私の手にかかる美佐子の息が熱い。

私は両手で美佐子の頬を押えつけ、唇を合せる。

舌を差しこむと痛い程に吸上げてくる。その舌に応じながら私は頬の手を、顎から首、そして更に両肩にまでぬめらせ、強く身体を抱しめる。

美佐子の目許が苦しげに歪み、唇が重なり合っている為にひしゃげてしまったうめき声が喉か

ら漏れだしてくる。

その彼女の息遣いの音を聞きながら、私は急速に感情が昂ぶって行くのを覚える。

私はまるで引き剥がすように彼女から唇を離す。その動きがあまりに性急であった為に唇が一瞬半開きのままになる。

抱いた彼女の身体をぐるりと回し、背中を私に向けた格好になった彼女の背中を軽く前方に押す。

私の行動を予想していたのだろう、彼女はワープロの置かれている机に手をつき腰を私に差し出した。

私はスカートの上からその腰と尻を撫で回し、その量感を味わう。

奇妙だった。薄い生地のスカートの下に当然感じる筈の下着の感触がなく、柔らかな尻肉の感触だけが生々しく感じられる。

美佐子は下着を付けていないのだ。私は彼女の片方の尻房を掴み上げる。

奇妙な音が私の耳にとどく。

目を上げると、机の上のワープロのスイッチが入っている。今の音はワープロの起動音だったのか。

美佐子が片手で器用にキーボードを打きはじめる。薄い点線が表示されたフルカラーCRTに文字が打ち出されて行く。

(はげしく) 一激しく一(して) 一激しくシテ一(おしり) 一お尻も一(いっぱい)

私は彼女のスカートを捲くり上げる。スカートを止めているベルトが引き締った胴に赤い跡をつけている。

私はその裾が彼女の首筋に達するまでスカートを捲り上げる。

薄いカーテンを通しただけの陽光が剥き出しの尻に射す。日の光の中にまざまざと晒された白い尻が、私の欲情を激しく刺激した。

目が、わずかに開き加減となった彼女の尻に、そしてその尻から腰、背中に通じる曲線に引き付けられる。

私は前屈みになり、その曲線のはじめる部分、背中の中央あたりに舌を付け、ゆつくりと背骨に沿って舐め下ろして行く。

美佐子のため息を吐き、背中が期待に震える。尾底骨を通過し、私は更に舌を進めて行く。両手で尻房を開き、その中心の小さな窄まりを舌で捉えた時、彼女がはつきりと声を上げた。

新鮮な石鹸と香水の匂いがした。

ワープロのCRTに意味のないただ一つの文字だけが連続して表示されて行く。

私は屈んでいた身体を起し、彼女の脇の下に手を回す。服の上から乳房を握ると、手に服とその下のブラジャー、そして柔らかな感触が伝わってくる。

彼女の耳たぶを軽く噛み、この前の時には着けていなかったイヤリングを舌でもてあそぶ。熱い息を耳口に吹きこむと、わななきが彼女の全身を走った。

私は彼女の膝の関節と背中に腕を回し、横抱にして持ち上げる。

そのまま彼女を抱いて、キッチンへのドアを開けようとした時、腕の中の美佐子が小声で囁いた。

「違うわ……ベッドは反対側の部屋……」

「良いんだ」

私は答え、キッチンのドアを開く。

やはりそこには冷蔵庫があった。私はその横の流し台の前に彼女を下ろし、運んでいる間に下がってしまったスカートを再び、大きく捲くり上げる。

彼女の生活の「におい」が立ちこめるキッチンという場所で、上半身を着衣のままに、剥かれた裸の尻を私に向かって突き出したその姿は、背後から一気に貫いてしまいたくなる程に私の欲望を誘った。

「脚を開いて。もっと大きく」

美佐子が私の求めに応じる。尻肉の狭間から股間にと続く肉の台形の形が更にあらわになり、そこに開いた二つの花弁がその奥の造りまでを剥き出しにする。

背後から尻を撫ぜ、その奥に手を差しこんで二つの個所を愛撫すると、溢れ出してきたぬめりが手に触れた。

「ああ……!!」

肉襞を指先で開き、その頂点の尖りを軽く押しつぶすようにこね回した時、美佐子が快樂の甲高い声を上げた。

私はズボンのチャックを下ろし、下着の中から固く勃起している剛直を取り出す。

片手に握ったそれを、美佐子の剥き出しの尻の狭間に当て、先端をゆつくりとはわしながら、もう片方の手で秘肉に触れる。

濡れた肉襞が亀頭によって捲りあがり、私の滲み出した粘液と美佐子のぬめりが交じり合い、短い糸を引く。

秘部を過ぎ、その上の小さな窄まりを捉える。

無数の細かい皺に囲まれた彼女のその窄まりは、私の亀頭の下で息衝くかのように細かく震え、

そして軽く押し付けると、まるで私を欲するかのように淫らに蠢いた。

片方の手は既に、彼女のしたたりによってべっとり濡れている。

私はその手を彼女の尻に塗り付ける。前方の窓からの日光がそのぬめりに反射し鈍く輝く。尻を掴み、そして一気に彼女の濡れた肉壁を貫く。

「うっ！」

美佐子が、私のその急すぎる挿入に重い声を上げた。しかしそれはすぐに甘い喘ぎに代わった。彼女が更に尻を突出し、上半身をかがませる。挿入が深くなった。

私は両手で彼女の尻を押し広げながら、挿入の時と同様に、決してやさしいとは言えない動きで背後から攻めたてる。

私の額に汗が滲みだすなか、快感に彼女の背中がうねる。柔らかく熱い肉穴がうねるように剛直を締め付ける。その縛めにも似た甘い締付けを、私は振り切るかのように激しく動き、そして動き続ける。

射精の最初の兆候が生じた時、私はより深く彼女の中に突き入れ、そしてそこで動きを止める。中断された快樂に、彼女がもどかしげに腰をくねらせる。

私は、すぐ隣にある冷蔵庫を開き、中の黄色かった光に照らされた庫内に、欲するものを見つける。

私はバターのパッケージを取り出し、蓋を開け、半分程残っている黄色い塊を掴み取る。

私はその、手の体温で溶けだす塊を彼女の尻の狭間に塗り付けていく。

彼女の背後の窄まりは、私とその下の肉穴を深く貫いている為に、奥からの圧力によって丸く円を描きながら盛り上がっていた。

私はその窄まりにバターを塗り付けていく。

美佐子の体温で溶けたそれと、彼女のしたたりが交じりあって、特有の匂いが立ち昇る。

肉穴が一層激しく蠢き、私を締め付けてくる。

美佐子が腰を前後に振りはじめる。

だが私は、その動きを押し留め、溶けたバターにまみれた指を彼女の後ろの窄まりの中に挿し入れていく。

「あああ……！」

別の部分を犯していく私の指の奇異な感触に、美佐子がおののくような声を上げる。

根元まで挿し入れた一本の指をゆっくりと動かし、そして窄まりの緊張がほぐれた時、更にもう一本の指を挿入する。

二本の指に、彼女の最も秘めた部分の筋肉の動きが伝わってくる。それはまるで何十本もの輪

ゴムが寄合わされ、蠢いているかのようにだった。

揃えた指をゆっくりと出し入れすると、彼女の息が荒くなった。しかしそれは明らかに秘部を犯した時のそれとは違っていた。

もっと深く、そして緩やかなのだ。

繰り返しているうちに指が楽に動くようになる。

抜き去った時、半ば開いたその奥に、彼女の中のわずかに黒みがかった鮮紅色が覗く。

私は、秘部を貫いている剛直を抜き出す。それは、ぬめりによってべっとり濡れていた。

「入れるよ」

「ええ……」

美佐子のうわずった声。

私は剛直の先端を、バターに塗れ、まだ完全に閉じ切っていない彼女の窄まりに当てる。手を添え、押し開くように挿入していく。

亀頭が埋まった時、狭い肉菅の筋肉がきつく私を締め付けてきた。

私そのままゆっくりと腰を進めていくと、彼女が深く息を吐き出す。

剛直の根元が彼女の開いた尻の狭間に密着した時、私は暫し動きを止め、彼女のもう一つの内部の感触を味わう。

私の中で昂ぶりが亢進し、そしてそれが押さえ切れないものになった時、私は、バターでぬめる両手で彼女の腰を掴み、そして動きはじめる。

秘部とは種類の違う締め付け、絡み付いてくる筋肉の蠢き、そして快楽。

私は低いうめき声をあげる。

私の下で彼女は大きく、深い息を繰り返している。その息が次第に早くなり、声が混じりはじめる。首が激しく振られ、流し台を掴んだ手に力が入る。

彼女の白くなった指の関節と、背中の中うねり、よじれたその上にはつきりと背骨の形が浮かび上がる。

彼女のうわ言のような声。

「変、変よ、変なの。もどかしいわ、もっと動いて、もどかしいの」

私は激しく腰を動かす。剛直全体を包みこむような強い締め付けが、急速に私を射精に駆り立てていく。

私の下腹部とそこに当る彼女の尻肉は、私の汗と彼女の汗、そして溶けたバターによってべっとり濡れている。

射精が近いのを自覚する。

手を彼女の腰から前に回し、起立した肉の芽をまさぐる。

親指と人差し指、そして中指の三本でつまみあげた時、彼女が快楽に身体を震わせた。

激しい衝動が、剛直を、そして尾底骨から背骨に向かって突き通る。

次の瞬間、私は多量の白濁を彼女の腹の中に発し、そして同時に、前に回した指で強く彼女の突き立った肉の芽を捻り上げる。

「ああ!!!」

美佐子が悲鳴に近い、絶頂の声を張り上げる。

数瞬の緊張の後、ゆるやかに彼女の全身から力が抜けていく。

私の前で彼女が、床にがっくりと膝をつく。

床に数滴したたり落ちた溶けたバターはその横に、彼女の、私の犯した窄まりから溢れ出した白濁がしたたり落ちていく。

余韻の中で瞳を閉じ、息を吐く彼女を見下ろしながら、私は流し台の水道の蛇口を開き、食器用洗剤で手を洗う。

飛散った数滴の水が彼女の尻に飛び、そこで透明な輝く粒となった。



美佐子とはじめて合った時から季節が移ろうとしていた。

私達はお互いの体を文字通り貪りあい、まるで何かの実験でもするかのように様々なセックスを試みた。

自分の欲望に忠実であろうとする彼女は、私の要求を拒む事はなく、時折、私に淫らな要求しさえした。そして私達はそれをお互いに楽しみ、堪能していった。

それは熱に浮かされたような数ヶ月間であった。



ネクタイで両手首を背中で縛り上げられた美佐子が、ベッドで仰向けに横たわる私の下腹部で激しく上下に腰を振っている。

支えるものもない彼女の乳房は、その腰の動きに同調してたわみ、揺れ、私との下腹の接点からは、舌なめずりするような淫らな音が立つ。

美佐子の腰の上下の動きに捏ね回すような前後の動きが混じりはじめる。それは、秘部の快樂

の尖りを私の剛直の付根に強く擦り付けようとする為であり、彼女のピークが真近である事の証拠だった。

「いきそう……いきそうよ……お願い、胸を……」

美奈子が早い調子の喘ぎが混じった声で私に言う。

私は両手で上下に揺れる彼女の乳房を掴み、もみ上げながら、親指と人差指で摘んだ乳首を強く捻り上げる。

固く突起した乳首が私の指の間でひしゃげ、美佐子が苦痛と快感の混ざった声を上げる。その瞬間、彼女は絶頂の声を張り上げ、身体を弓なりに反らせる。

私は、精液を渴望するかのように強く蠢く美佐子の秘肉を感じる。

「ああ……」

美佐子が、射精を受入れることなく達してしまった事を悔むような、切ない声を上げて、私に覆い被さってくる。起立したままの剛直がぬめった肉穴から抜け出る時、再び彼女は低く声を上げた。

背中であ腕を縛られている彼女は、私の身体に覆い被さったまま膝を使い、身体をずらせて行く。

私の乳首を唇で捉え、柔らかく歯を立てる。口が塞がれてしまった為に、鼻からの呼吸が少し荒くなった。

私の両方の乳首を舐めた後、彼女はさらに身体をずらし、自分の滲ませたもので濡れた起立したままの剛直を啜える。

私は顔を上げ、両手が束縛されている為に、ややたどたどしく動く美佐子の顔と唇を見つめる。彼女の舌が亀頭をはい、その先端が尿道の窪みを舐め上げると強い快感が走る。唇が強く窄められ、吸い上げられた時、私はくぐもった快感の声を漏らす。

美佐子を促し、腰を向けさせる。

私の胸の上に乗った尻と、その狭間の肉襞を視姦しながら、私は彼女の唇の動きを楽しむ。両手で尻を開くと、愛液にまみれ、陰毛がまとわり付いた肉襞とその上の窄まりが見える。

美佐子はその自分の部分を見せ付ける為に、更に尻を突き出す。一段と尻が開き、濃い雌の匂いが香る。

私は両手で彼女の尻房を強く掴み、引き裂くように割り開く。二枚の肉襞が割れ、内側の粘膜が張りを見せ、襞の奥に隠した肉穴を覗かせる。

美佐子が私を啜えたまま、深く視姦される喜びにくぐもった声を上げる。秘部が新たなしたりを滲ませる。

私は美佐子の肉穴に親指を挿入し、そしてその上の窄まりには人差指を挿しこむ。

両方の指をゆつくりと前後に動かし、その狭間の薄い肉壁を挟んで指を擦り合わせるように動かす。

彼女がうめきを漏らし、両方の指に筋肉がまとわり付いてくる。

私の剛直を舐めしやぶる口の動きが激しくなる。その快感に押さえ切れなくなった私は、指を締付ける二つの肉穴の蠢きを楽しみながら、彼女の口の中に白濁を放つ。

一瞬後、彼女の喉が鳴り、剛直が吸い上げられる。

達した直後の剛直は一段と敏感だ。それを承知している彼女は、固さをときはじめた剛直を柔らかに舐め、そして再び、彼女の喉が鳴った。

二度の行為によって消耗し、ベッドに横たわる美佐子の腕からネクタイを外した後、私はバスルームに向かう。

少し熱目に調整したシャワーを全身に浴びると、髪の上に溜まっていた汗が湯に流れ出し、わずかな塩気を感じる。

手で唇の回りを拭いた時、乾いた美佐子のぬめりを感じ、私は反射的に唾を吐いていた。下腹部を手で擦ると、やはりそこにも湯に流れ出すぬめりが感じられた。もっともそれには私のものも多分に混ざっているのだろうか。

私は身体の汗とぬめりを洗い流した後、バスルームの鏡を覗きこむ。

湯気でくもる鏡の中からは、髪の毛が濡れてしまった為に、まるで数歳若返ってしまったように見える私の顔がこちらを見返している。

ふと唇に目をやる、口紅がついていない。

美佐子とのセックスの最中に、かわすキスはいつも激しいものだった。そして彼女が好む濃目の口紅が私の口に移り、バスルームでそれを私はいつも洗い落していた。

(今日は美佐子は口紅を……?)

その時私は初めて、先程の行為の間に一度も彼女と唇を合さなかった事に気がついた。

私はタオルを羽織ってバスルームを出る。

美佐子はまだベッドに仰向けのまま横たわっていた。既に薄れはじめてはいるが、両手首にはまだネクタイの跡が赤く刻印されている。

彼女は低く寝息を立てていた。

私は反射的にその唇を見る。やはりいつもの口紅を付けていた。私は彼女の頬に垂れ下っている髪の毛をかきあげ、まるで償罪であるかのように唇を重ねようと顔を近づけていく。

しかし、その時ふと彼女の下半身に目が行った。

豊かな尻が少し開きぎみになり、その狭間から既に乾いてしまった愛液にまみれた秘部が見える。そしてそこからは私が先程注ぎこんだ白濁が流れ出し、ベッドのシーツを汚していた。

私は彼女から顔を放し、身体に羽織っていたバスタオルを彼女の身体に掛ける。それは彼女の身体が冷えてしまうのを気遣うと言うよりも、私の視線から彼女の姿態を覆い隠す為であった。

バスタオルを取った身体が冷えはじめる。

以下、次回へ